

平成14年9月20日
福祉保健部

平成13年人口動態統計の概況について

平成13年の人口動態統計については、全国分の概況が先に公表されたが、このたび大分県の概況について取りまとめた。

調査項目（10項目）を前年対比で見ると、出生数、合計特殊出生率、死亡数、乳児死亡数、新生児死亡数、死産数、周産期死亡数、婚姻件数の8項目で、その数値が減少し、離婚件数は増加した。また、自然増加数は、その減少幅が縮小した。

今回の特徴としては、前年は、出生数、合計特殊出生率及び婚姻件数が増加し、いわゆるミレニアム効果とみられたが、再び減少に転じたことや離婚件数、離婚率が過去最高を更新したことなどが挙げられる。

また、平成11年以降、3年続けて死亡数が出生数を上回る自然減の状態となったが、死亡数の減少により、その差は毎年縮小している。

なお、調査項目を全国順位（ベスト順位）で見ると、出生率、合計特殊出生率、死亡率、自然増加率、乳児死亡率、新生児死亡率、周産期死亡率の7項目で前年より上昇した。

※ 人口動態統計とは…戸籍法等による、出生、死亡、婚姻、離婚及び死産の5つの届出を基に市町村長が作成する人口動態調査票を取りまとめ、集計したもの。

<結果の概要>

1 出生

(1) 出生数は、10,891人で前年より19人減少し、出生率（人口千対）は、9.0で前年と同じであった。

出生率は昭和49年以降低下が続いていたが、平成3年以降は、上昇と低下を繰り返しており、全体として低下傾向が緩やかになっている。

(2) 出生数を母の年齢（5歳階級）別にみると、前年に比べ、20歳代後半では減少しているが、30歳代では増加している。

母の年齢階級別出生数

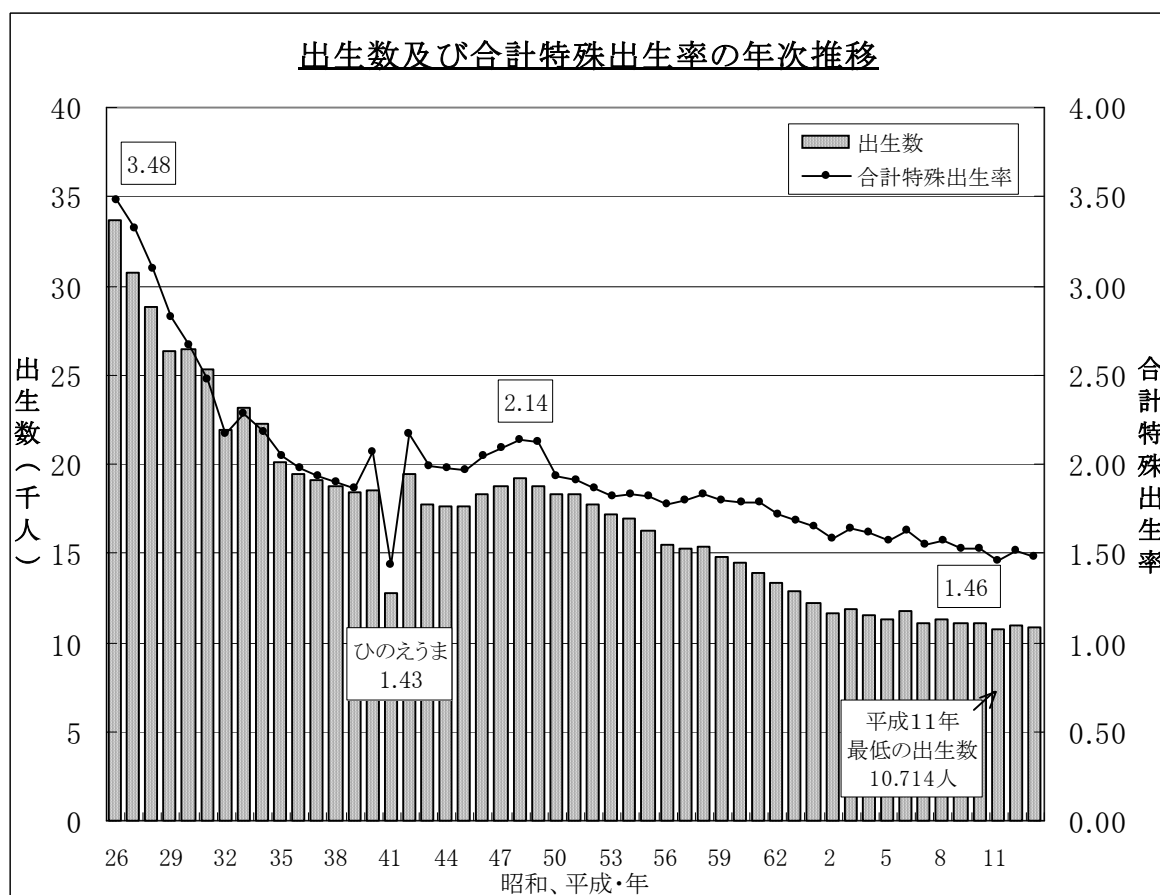
年齢階級 (歳)	出生数(人)	
	13年	12年
15～19	182	201
20～24	1,652	1,658
25～29	4,302	4,431
30～34	3,463	3,352
35～39	1,153	1,131
40～44	133	135
45～49	6	2
合計	10,891	10,910

2 合計特殊出生率

合計特殊出生率は、1.48で前年の1.51を下回った。

その年次推移をみると、昭和50年以降低下傾向にある。

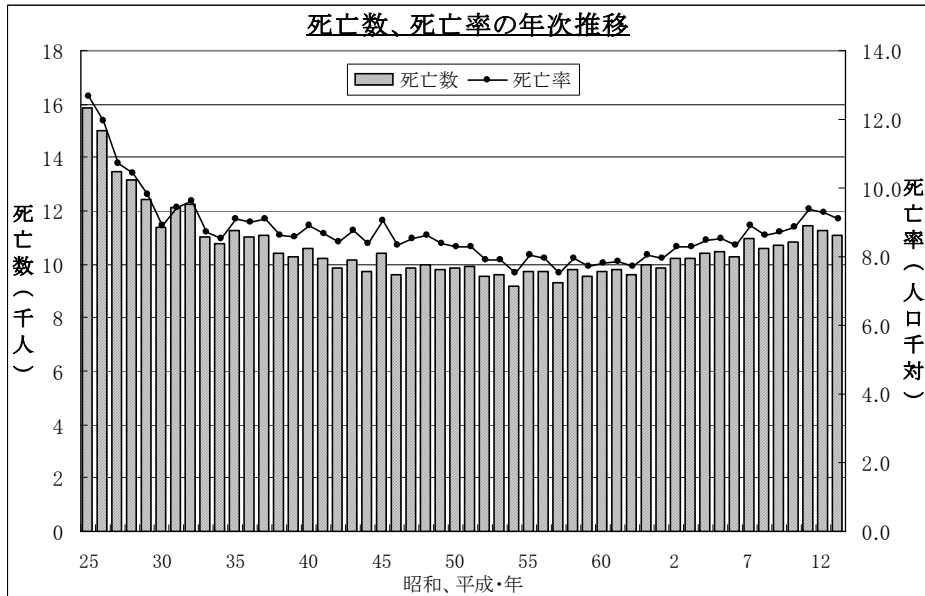
なお、全国の合計特殊出生率は1.33で、過去最低となった。



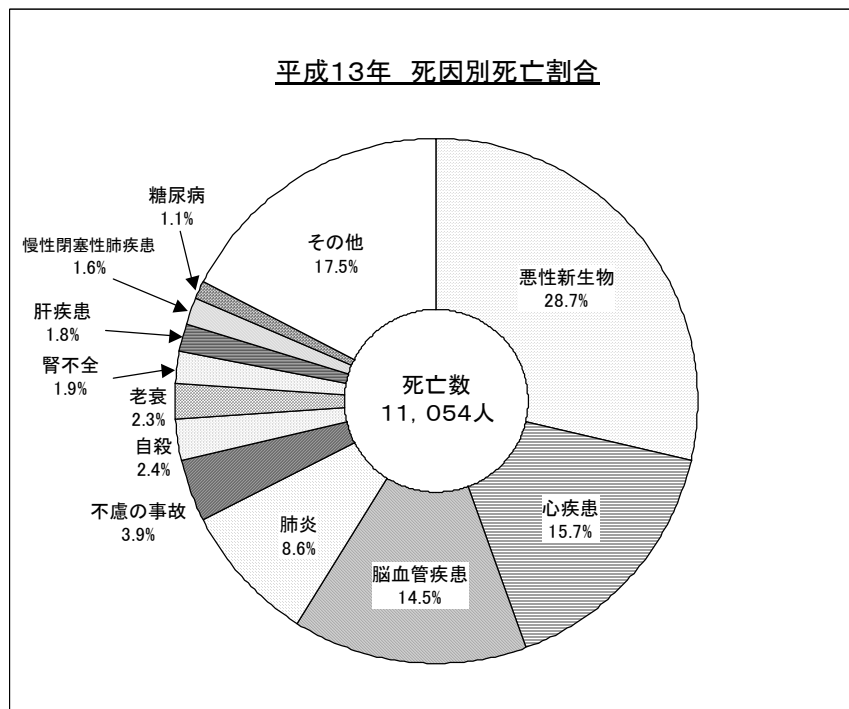
3 死 亡

(1) 死亡数は、11,054人で前年より235人減少した。

死亡率（人口千対）は、昭和57年以降上昇傾向にあるが、平成13年は9.1となり、2年続けて前年の数値を下回った。



(2) 死因順位についてみると、第1位は悪性新生物（28.7%）、第2位は心疾患（15.7%）、第3位は脳血管疾患（14.5%）で、この三大死因が死亡数の約6割（58.9%）を占めている。



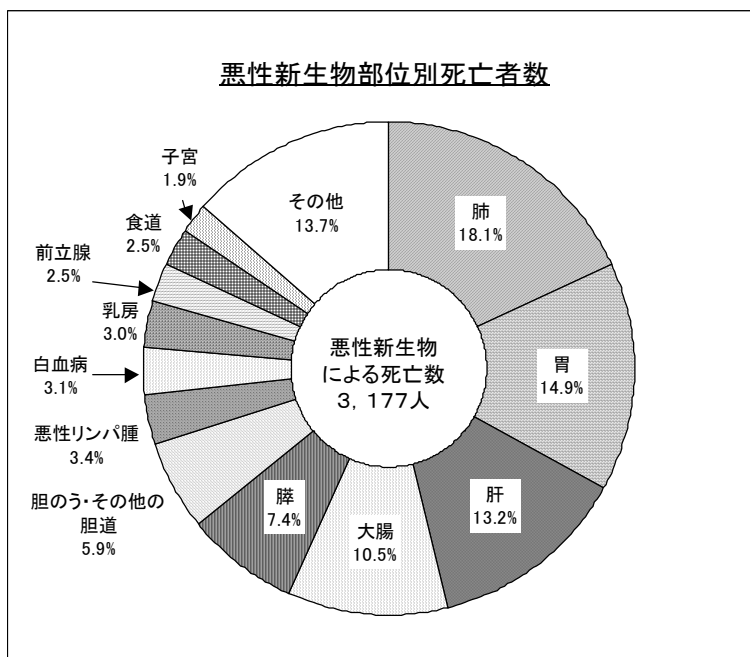
また、死因別死亡数を前年と比較すると、減少したのは、心疾患（130人減）、肺炎（85人減）、自殺（58人減）、悪性新生物（25人減）などであり、増加したのは、肝疾患（46人増）などである。

主な死因別死亡数・死亡率

死 因	平成 13 年				平成 12 年			対前年比 死亡数
	順位	死亡数	死亡率	割合	順位	死亡数	死亡率	
全 死 因		11,054	909.8	100.0		11,289	928.0	△ 235
悪性新生物	1	3,177	261.5	28.7	1	3,202	263.2	△ 25
心 疾 患	2	1,735	142.8	15.7	2	1,865	153.3	△ 130
脳 血 管 疾 患	3	1,601	131.8	14.5	3	1,621	133.3	△ 20
肺 炎	4	950	78.2	8.6	4	1,035	85.1	△ 85
不慮の事故	5	436	35.9	3.9	5	432	35.5	4
自 殺	6	265	21.8	2.4	6	323	26.6	△ 58
老 衰	7	258	21.2	2.3	7	225	18.5	33
腎 不 全	8	210	17.3	1.9	9	191	15.7	19
肝 疾 患	9	195	16.0	1.8	10	149	12.2	46
慢性閉塞性肺疾患	10	175	14.4	1.6	8	195	16.0	△ 20
糖 尿 病	11	120	9.9	1.1	11	138	11.3	△ 18

注)死亡率は人口10万対。

なお、悪性新生物の部位別の死亡順位をみると、肺がん（18.1%）を筆頭に、胃がん（14.9%）、肝がん（13.2%）、大腸がん（10.5%）と続き、この4つで悪性新生物全体の約6割（56.7%）を占めている。



4 自然増加

(1) 出生数から死亡数を差し引いた自然増加数は、マイナス163人で、平成11年以降、死亡数が出生数を上回る自然減の状態となっているが、2年続けてその減少幅は縮小している。

自然増加率（人口千対）は、マイナス0.1で前年のマイナス0.3に比べ、減少幅が縮小した。



5 乳児死亡

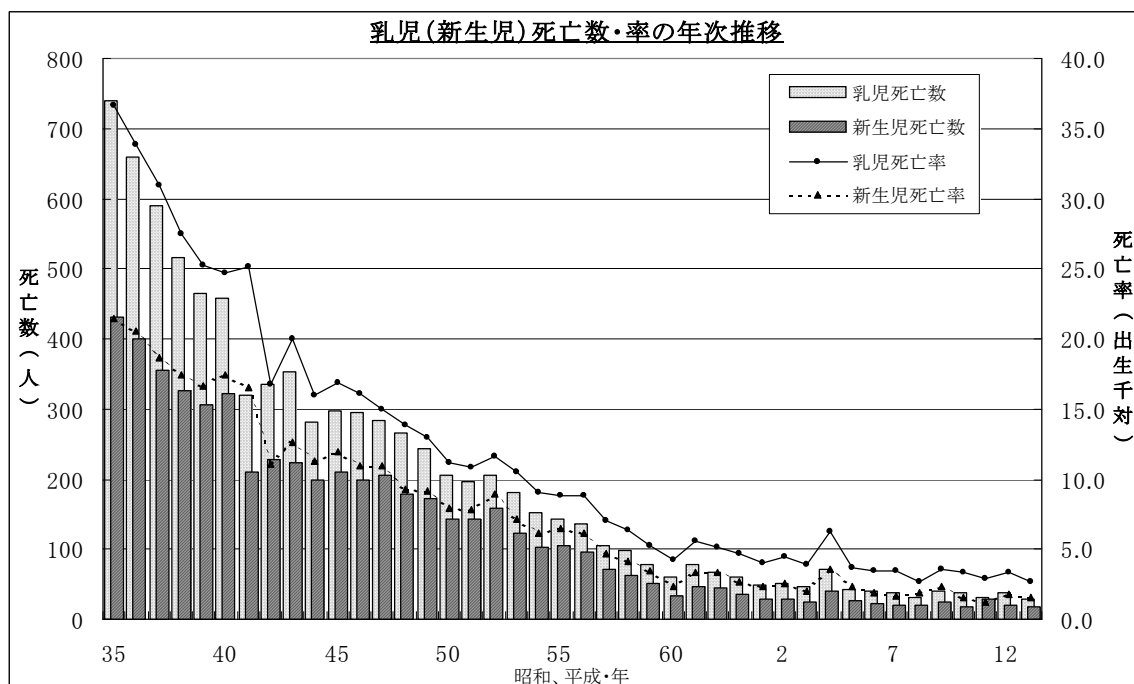
生後1年未満の死亡である乳児死亡数は、29人で前年より8人減少した。

乳児死亡率（出生千対）は、2.7で前年の3.4を下回った。その年次推移をみると、昭和60年までは急激に低下し、その後は、上昇と低下を繰り返しながらほぼ横ばいに推移している。

6 新生児死亡

生後4週未満の死亡である新生児死亡数は、17人で前年より3人減少した。

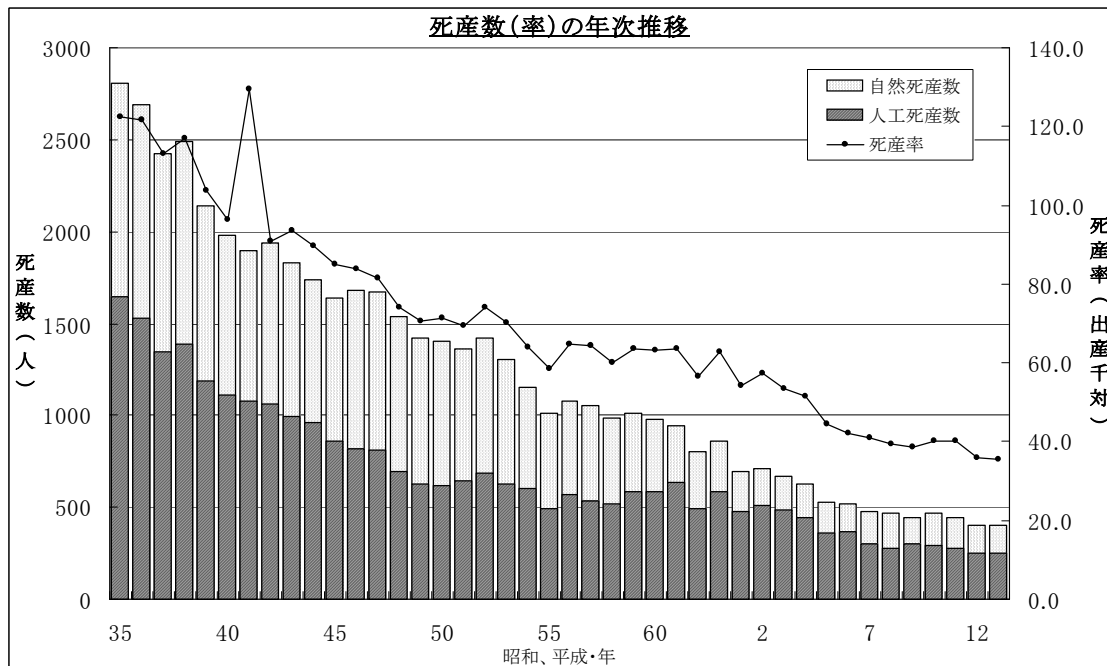
新生児死亡率（出生千対）は、1.6で前年の1.8を下回った。その年次推移をみると、乳児死亡と同様にここ数年はほぼ横ばいに推移している。



7 死産

死産数は、401胎で前年より3胎減少し、その内訳は、自然死産数が5胎の減少、人工死産数が2胎の増加となっている。

死産率（出産千対）は、35.5で前年の35.7を下回り、過去最低を更新した。



8 周産期死亡

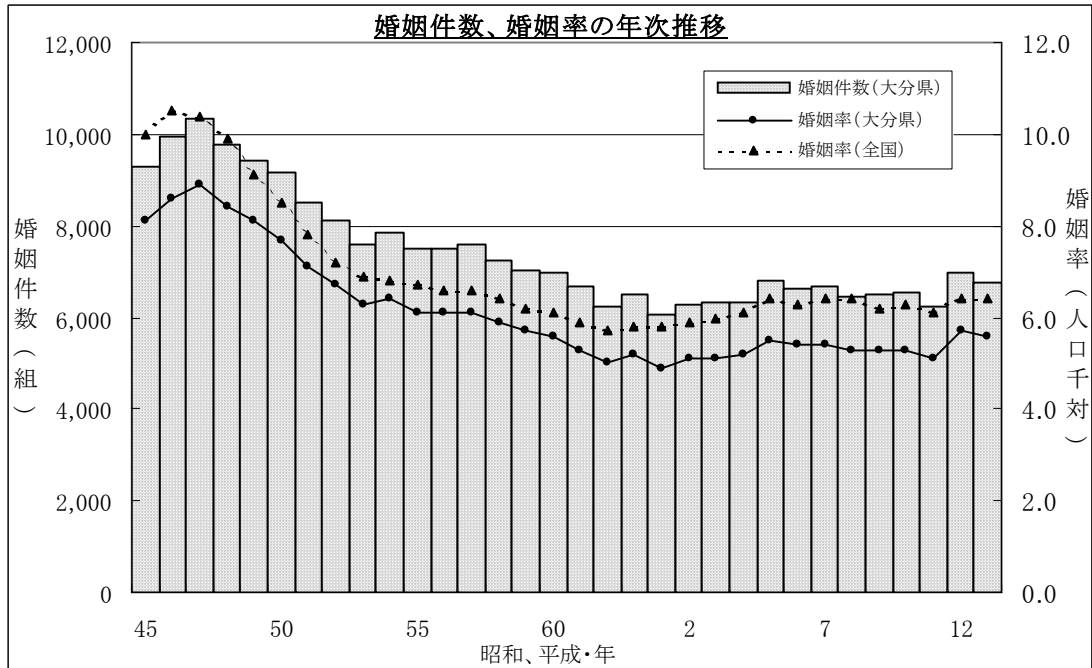
妊娠満22週以後の死産に、生後1週未満の早期新生児死亡を加えた周産期死亡数は、56で前年より8下回った。

周産期死亡率（出産千対）は、5.1で前年の5.8を下回った。

9 婚 姻

婚姻件数は、6,747組で前年より230組減少した。

婚姻率（人口千対）は5.6で前年の5.7を下回り、その年次推移をみると、昭和48年以降低下を続けた後、昭和62年以降はほぼ横ばいに推移し、平成12年に大きく上昇したが、平成13年は低下した。



なお、平均初婚年齢は、夫28.4歳、妻26.9歳であった。

夫については、平成に入ってほぼ横ばい傾向にあったが、平成12年から上昇傾向となっている。妻については緩やかな上昇が続き、晩婚化が進んでいる。

平均初婚年齢の年次推移

	夫		妻	
	大分県	全 国	大分県	全 国
平成2	28.3	28.4	25.9	25.9
3	28.2	28.4	26.0	25.9
4	28.2	28.4	26.0	26.0
5	28.2	28.4	26.1	26.1
6	28.2	28.5	26.1	26.2
7	28.2	28.5	26.2	26.3
8	28.2	28.5	26.3	26.4
9	28.1	28.5	26.3	26.6
10	28.1	28.6	26.5	26.7
11	28.0	28.7	26.6	26.8
12	28.1	28.8	26.7	27.0
13	28.4	29.0	26.9	27.2

10 離 婚

離婚件数は、2,606組で前年より255組増加し、過去最高となった。

離婚率（人口千対）は、2.14で前年の1.93を上回り、過去最高を更新した。その年次推移は平成3年以降、上昇傾向にある。

全国の離婚件数（28万5911組）、離婚率（2.27）も、過去最高を更新している。

